**週刊やすいゆたか123号14年2月13日**

**アダムとエバの人間論３**

　　　　　**１蛇の誘惑**

**欲望の蛇がいつしかとぐろ巻き、罪にいざなうアンニュイの午後**

立男：いよいよ誘惑の蛇の登場ですね。こいつはなかなか狡賢くて、初心なアダムとエバを罪に誘うのでしたね。**「園の中央に生えている木の果実だけは食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから」**と神に言われていたのに、蛇が**「決して死ぬことはない。それを食べると目は開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ。」**と言って、そそのかしたのです。

命子：あれ、おかしいですね。蛇は別に嘘をついているわけではありませんよ。別に食べたから死ぬのではなしに、神に背いたから死ぬことになるのでしょう。木の実そのものに毒性はないのです。それに食べれば善悪を知ることになるというのは正しいのです。

やすい：おそらく蛇は先に善悪を知る木の実を食べていて、自分が死ななかったから、そう教えているのでしょうね。きちんと読むと蛇はそれほど悪者ではありません。

立男：でも蛇はエバを誘惑して、肉体関係までいってたという話聴いたことがありますよ。

やすい：そういう穿った解釈もあるようですね。でも実は蛇の方が初心でエバに誘惑されていた可能性もあるでしょう。蛇はアダムとエバの退屈しのぎにするために、神が創造して二人に与えたかもしれません。とするとアダムとの関係で倦怠期に入っていましたので、エバは新入りの新鮮な蛇に惹かれてしまったかもしれません。

立男：なるほどではどうして蛇はまるでサタンみたいに扱われてきたのですか？

やすい：蛇はサタンだというように解釈する人もいますが、**「創世記」**にはそのような記述はないのです。ただヘブライの人々の信仰では蛇は敵役なのです。最も原始的な信仰はフェティシズムです。その代表的な信仰が蛇信仰と石信仰なのです。ヘブライ人も昔はフェティシズムだったのです。彼らは石を神にし、石を枕に寝たりして身を守ってもらっていました。同じカナンに蛇信仰の部族がいたりしたのです。その蛇神に自分の子供を生贄にする儀式があったりしたのです。ヘブライ人にしたら随分恐ろしい神だと感じたのです。それで蛇に悪い印象を持ってしまったようです。

命子：私は爬虫類特に蛇には生理的に弱いのですが、そういう気持ち悪いと言う印象から蛇が悪者にされているのではないのですか。

やすい：蛇の方が命子さんを生理的にどう感じるのか、蛇にも伺わないと公平ではありませんね。確かに蛇や蜥蜴などの爬虫類は生理的にゾクゾクするような刺激があります。それに彼らは性的にタフというか一度まぐわったら二・三日離れないですからね。そこからくる欲望の化身のようなイメージがあります。

立男：ということは蛇に誘惑されているというのは象徴的な表現なので、本当はアダムとエバの欲求不満が昂じて、禁断の木の実に向かってしまったということですね。

やすい：その通りですね。欲望の蛇は実は人間たちの心に潜んでいて、とぐろを巻いているわけですが、アンニュイ(倦怠)等からその蛇が次第に実体化し、心から独立して誘惑の蛇となって立ち現われ、罪へと誘うのです。だからこの蛇は欲望の対象化、自己疎外であると言えますね。

命子：そういえば高校倫理でもマルクスの「疎外された労働」四つの疎外習いましたね。

やすい：元々はヘーゲルが意識の自己疎外論を展開していたのです。意識は自己を認識するために自分の考えていることを意識の外に出し、意識に相応しい事物として自己を認識しようとします。ですから事物は意識の外にあって、意識でない物、意識に対立する事物のように見えますが、それは意識の疎外された姿に過ぎないのです。意識は事物からの疎外を止揚するために、事物を意識として述語付け、意識に還元して取り戻します。

　蛇の場合は欲望という意識が、蛇という形で事物の姿で立ち現れたのです。そして意識に外から働きかけ、罪に誘うわけですね。本当はアダムやエバが食べたいから食べるのに、蛇のせいで食べてしまったことにするわけです。

立男：神も正直に「神様から禁じられていたので悪いとは思いながら、あまりに単調で園の果物の味にも飽きてしまっていたので、つい出来心で、自分が抑えきれずにやってしまいました。もう言いつけに背くことのないように努力しますので、お許しください。」と謝られれば寛大な処分で済んだのかもしれませんね。

　　**２禁断の善悪を知る木の実**

**各々が善悪知らば各々の正義の旗が戦始むや**

命子：ところで素朴な疑問なのですが、どうして神は善悪の智恵の木の実を禁断にされたのですか。善悪の判断を人は出来なくてもいいのですか。

やすい：大事なことに気づきましたね。ベーコンは『ノヴム・オルガヌム』という本を書いて新しい帰納法を開発し、これでいくとどんどん賢くなって、人間の自然支配はますます大きくなり、大変便利で暮らしやすい世界になると吹聴した。そのさいそれは人間の分を超えているのではないか、人間は禁断の智恵の木の実を食べて、賢くなり過ぎている。これ以上自然の秘密を暴いたら、神の罰が下るに違いないという批判をあびました。それでベーコンは、それは大変な誤解だ。神様は善悪を知る木の実を禁断にされたのであり、自然科学的な智恵は大いに発達させたらいいのだと言ったのです。彼は、神は世界を人間のために造られたのだから、世界を知りそれを人間の為に利用することは、神の創造をたたえ、神の愛にこたえるすばらしいことなんだとしたのです。

立男：それでどうして善悪を知ってはいけないのですか。

やすい：それは何が善で何が悪かは、神がすべて決定して、人間に言い渡すから、それにみんなが従えばいいということなのです。もしそれぞれが善悪を判断しますと、百人いたら百人の善悪の基準ができてしまい、善を貫くために間違った正義を唱える連中を排除しなければならなくなります。それでは平和は保てない。だから自分の頭で善悪は考えないで、すべて神に任せなさいという考え方なのです。

命子：それこそ宗教による恐怖独裁になってしまいます。

立男：それで一神教どうしが自分たちの正義を相対化できない理由が分かるような気がしますね。

**３　パンツをはいた猿**

**智恵の実を食べてはじめて隠せしは性器ならずや悲しき性(さが)かな**

**何ゆえに人は隠すや秘めどころ時来たりなば見せむがために**

命子：**「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人は目が開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。」**男より女の方が好奇心が旺盛で、感じやすく、発展的で、冒険心もあるようですね。女はもうたまらなくなって、木の実を取って食べました。そして男にも食べさせます。死なば諸共というか、独りでは不安でしょうからね。でもこれはエバ主犯説を取ることによって、男性の女性支配を合理化するために書かれたようです。それにしてもすぐに効き目が出て、性器をイチジクの葉で隠したと言うのはおもしろいですね。

立男：考えることが先ず性のことだということがわかりますね。これは悲しい性ですね。

やすい：人間の本性として性的人間ということがよく言われます。つまり人間ほど好色な動物は少ないということです。直立歩行するようになって、それと関連して、女性の発情に伴って男性が発情するのではなくなったので、男性は四六時中発情しやすくなったというわけですね。それに女性性器が前付きになることで性交の態位がバリエーションが多くなります。

命子：この前、ＮＨＫの『地球大進化』でやってましたが、高等な猿は視力がすごくいいそうですね。それで表情でコミュニケーションをとるようになったといいます。お互いに対面して見詰め合うということで、メンタルな面でも盛り上がります。次第に男性に見られることを意識してというか、男性が見た目の美しさ、セクシーさによって女性を選別することもあり、現在のような女体が作られたということですね。

立男：でも賢くなったらどうして性器を隠すのですか。

やすい：それは二つの理由が考えられます。一つは抑圧です。人間は放任しておくとセックスばかりして仕事になりません。そこで特に刺激的に造られている部分は隠して生産に励まなければならないということです。二つ目は、隠すのは見せるためです。普段隠しているからこそ、いざというときに隠していた葉っぱとかパンツを取ることで、強烈な刺激になり、強い快楽が得られるということなのです。そのことを論じたのが栗本真一郎著『パンツをはいたサル』です。栗本は文化人類学をエンターテイメントにした功労者です。

立男：衆議院議員を２期務めましたね。政治にも関心があるのですね。

やすい：核兵器廃絶運動はナンセンスだというのです。つまり彼に言わせれば文化はすべて余り物である。それを「余剰」と言います。パンツは脱ぐときの為に穿いておくように、余剰は、それを「蕩尽(とうじんーパッと使い果たしてしまう)」するためにあるのだというのです。これを「余剰蕩尽論」といいます。ポランニーという人の受け売りらしいのですが、それで文明というのも余剰だというわけですね。だからいづれ戦争とかでぶっ壊すために文明はあるんだ、これは法則的なことだから、さからってもしょうがないよというのです。

現代文明は大工業で巨大な機械文明を作り出した。それで当然これをぶっ壊すものがなければならない。そのために核兵器があるのだから、核兵器をなくしたら壊せなくなってしまい、法則に反することになる。だからそんなことは無駄なので、核兵器廃絶運動はナンセンスという議論をぶっていたのです。

命子：そんな馬鹿げた議論をしても大学教授や国会議員になれるのですね。

立男：そりゃあ反対ですよ。そんな馬鹿げた議論をしたから、話題になって本も売れたし、人気も出て、国会議員にもなれたということです。

やすい：でも「パンツは脱ぐためにはく」というのはなかなか鋭い文明批評ですね。余剰蕩尽論も文明の本質を抉る議論であることは認めなければなりません。だからたとえ有害で馬鹿げた議論をしていても、そこにある真実の一面を捉えた議論まで見逃しては、なりません。

 　　　　　　　**４責任転嫁**

**この罪は女のせいだと男逃げ、蛇のせいよと女はかわす**

命子：善悪を知る智恵の木の実はたくさんなっていたのでしょうが、それでも食べたことはすぐに神にばれてしまいます。彼らは賢くなったため、裸で神に見られることが恥ずかしくてたまらなくなり、神の顔を避けて木の間に隠れるからです。それで神に追求されて、先ずアダムはこう答えます。**「あなたが私と共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」**

　「こんな言い訳、しても言い訳？」まさしく責任転嫁です。あくまで自分が欲しかったから食べたのであって、無理やり食べさせられたわけではないのです。それなのに無理やり食べさせられたかのようにいい、悪いのは女だと言いたいかのようです。

立男：女も同じように答えています。**「蛇がだましたので、食べてしまいました。」**ですから。やはり「秘書が」というのと同レベルですね。それによく読んでみると蛇はだましていません。蛇は濡れ衣を着せられているのです。もっとも蛇も禁断の木の実と知っていて、食べていたでしょうから、同罪には違いありませんが。

やすい：誰の罪かと言われても、宗教的には神に従うのが善で、神に逆らうのが悪という基準でいきますから、みんな神の命令には逆らっているので有罪です。でも神は最初からお見通しだったわけです。だって人を欲望で動く機械として造っているわけですから、楽園の倦怠の中で欲求不満に陥り、罪に誘惑されるのは必然的なのですから。そういう意味では神のシナリオ通りで、誰が一番悪いかと言われれば、そういうシナリオを書いた神が一番悪い。しかし神は善悪の彼岸にいますから、神を非難しても始まらないということになっています。

命子：アダムやエバを無責任な人間に描くことで、しっかり罰を与え、責任を取らせ、自分の言動に主体性を持ち、責任を取れるようにしようとされているわけですから、これも神の愛ですね。

やすい：ここで神のやり方を汚いとか思って、ひねくれてしまうと駄目になっていきます。たとえ納得いかなくても、神は人間がかわいくてたまらないのですから、そこのところ神を信頼して、進んで処分を受ける心構えでないといけないのです。こうしてはじめて人間は「応答しうる存在」「責任人間」として人格になりうるのです。そういう人間観が汲み取れますね。　　　続く